

熊本県における昭和20年代の合唱指導 —合唱指導者としての岩津範和¹—

国府 華子

音楽教育講座

Teaching Chorus in the Showa 20's in Kumamoto Prefecture

Hanako KOU

Department of Music Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

本研究の目的は、熊本県における合唱活動の史的展開を明らかにすることである。これまでに、日本における合唱の歴史については詳細な研究がなされているが、それぞれの地方における史的展開については未だ明らかにされているとは言えない²。

これまでの研究において、昭和26年に発足した、熊本合唱連盟の初代理事であった、梅澤信一、岩津範和、有馬俊一が、当時の熊本県の合唱活動を牽引してきたものと考え、特に有馬俊一の熊本県立第一高等女学校（現、熊本県立第一高等学校）での合唱指導について明らかにしてきた³。有馬の功績は、熊本県立第一高等学校の合唱を全国レベルにまで育て上げ、その伝統を築き、熊本の合唱活動をひっぱってきたことにあると言ってよいだろう。そしてその合唱指導は、有馬の作曲家や作品に真摯に向き合い、追究し続けることによって得られた深い理解と解釈によって生み出されたものであると考えられる。また、自身の指導だけでなく、環境を整えることにも心を配り、広い視野で合唱教育を支えたのである。最初に高いレベルのものをつくりあげれば、後の者はそれに続いていくという有馬の考えは、第一高等学校に留まるものではなく、熊本全体の合唱に引き継がれていったのである。

この有馬による熊本県立第一高等学校の合唱指導のスタートが、昭和15年であった。当時の熊本での合唱活動の主なものには、梅澤信一が指導していた、ママさんコーラスグループ「マミーコール」（昭和22年頃に前身のグループがスタート）や、岩津範和が創設した「GK子供唱歌隊」（昭和22年発足）⁴と九州学院高校の「グリークラブ」また、そのOBが母体となって創設された男声合唱「デメーテル男声合唱団」（昭和25年発足）がある。つまり岩津は当時、同時に3つの合唱団の指導を行っていたことになる。高校の音楽教諭

という立場での指導だけでなく、子どもたちの合唱指導、そして大人の男声合唱の指導と、実に幅広く展開されている。今回は、岩津が指導していた合唱団「GK子供唱歌隊」と「デメーテル男声合唱団」に焦点を当て、指導を受けた教え子たちへの聞き取り調査⁵から、岩津の合唱指導の一端を明らかにしたい。

1 岩津範和の略歴と音楽活動

《略歴》

明治37年12月生まれ

大正12年3月 九州学院卒業

大正13年3月 熊本県第一師範卒業

卒業後は、熊本にて小学校訓導を務める。

昭和8年

上京

東京の小学校で勤めるかたわら、声乐を徳山璉、下八川圭祐、奥田良三に師事。

昭和11年4月

東京音楽学校作曲選科入学。

昭和14年7月

東京音楽学校作曲選科卒業。

昭和15年5月

東京日日・日本ビクターの児童独唱コンクールで教え子が優勝。

以後、東京中央放送局の児童合唱を指揮。

昭和21年

熊本に帰郷

県立第二高等女学校教諭

昭和23年

九州学院高等学校教諭

昭和43年

九州学院高等学校を退職

昭和53年

熊本音楽短期大学（現、平成音楽大学）客員教授

平成17年

逝去

岩津の音楽活動は、小学校、高校での音楽教師、学校

内外での合唱指導、その合唱に関わる編曲やその他の作曲活動、そして、個人での声楽指導など多岐に渡っている。また、熊本合唱連盟の理事や音楽コンクール、合唱コンクールの審査員を務めるなど、熊本の音楽発展に多大な貢献を果たした人物である。今回は合唱指導に焦点を当てて、「岩津範和先生音楽生活55周年記念音楽会」や「岩津範和先生追悼演奏会」などに集まる教え子たちを見ると、声楽家として活躍している者が非常に多いことがわかる。声楽指導者として、熊本で第一人者であったことの証とも言えるだろう。

合唱指導者としての岩津の特徴の一つは、様々な団体の合唱指導を行なっているところにあるだろう。子どもの合唱団である「GK子供唱歌隊」、高校生のグリークラブ、そして大人の男声合唱「デメーテル男声合唱団」、時期は後になるが、女声合唱の「マードレコール」（昭和44年発足）の結成、指導にもあたっている。特に子どもの合唱に携わったのは、岩津の経験によるものが大きいと思われる。

熊本県第一師範卒業後、飽託郡河内尋常高等小学校、飽託郡小島小学校、熊本市花園小学校、熊本市春日小学校などの訓導を勤めている。また上京後も、東京府八王子第三小学校、東京市葛飾小学校、東京市浜町国民学校、渋谷国民学校などに勤めている。この小学校教諭としての経験が、児童合唱の指導に活かされていたと考えることができるだろう。

また東京では、自身の声楽を磨くために個人レッスンに通い、その先生の合唱団に入るなど、積極的に声楽を学んでいる。さらに昭和11年には、東京音楽学校の選科に入学して作曲の勉強も行っている。自身の専門でもあった声楽をより深く学び、声楽という面からだけでなく作曲という側面からも音楽への理解を深め、そして教育という方面からも経験を積んだ充実した東京での音楽活動であったと推測できる。岩津本人が、インタビュー記事の中で「私自身はあまり帰りがたくなかったです」（岩津：1975、9回）と述べていることから考えても、東京での音楽活動をさらに高めていきたいという気持ちがあったものと思われる。熊本への帰郷は、本人の意思ではなく、周りからの強い希望があったことだったのである。

2 「GK子供唱歌隊」「デメーテル男声合唱団」の発足

GKというのはJOGK熊本放送局（昭和3年6月16日開局）からとった名称である。つまり、ラジオ放送のために結成された子どもの合唱団であったのだ。ラジオ放送のための団体としては、「熊本放送管弦楽団」と「熊本放送合唱団」が昭和16年に結成されている（NHK熊本放送局：1989、p. 23）。そして戦後になり、新たに「GKリズムグループ」「放送劇団」「児童劇団」そし

て「GK子供唱歌隊」が誕生したのである。放送については「生放送で夕方の時間だった。」（M、I）ようで、録音ではなく、全て生放送だった。「生放送だったから、音をたてられなくて、咳一つできなかったよね。」（I）というように、スタジオでの風景などが当時のメンバーにも印象深い記憶として残っていた。

この唱歌隊のメンバーは、希望者を集めたというだけのものではなかった。「小学校に連絡があったみたいで、学校の先生に言われて、試験を受けに行きました。《牧場の朝》を歌ったかな。」（I）「オーディションを受けましたよ。《若葉》を歌ったのを覚えています。」（K）というように、小学校などに通知を出し、試験をして選ばれた者がメンバーになることができるという流れだったようだ。そして、メンバーは小学校4年生から6年生が中心だったそうである。ただし、「中学生になっても声が変わってないと、来なさいと言われた。」（K）との話もきかれ、年齢については限定せずに、声を聞いて岩津が決めてものと推測できる。

デメーテル男声合唱団の発足については、「第6回定期演奏会」のプログラムに岩津の文章で以下のような説明がある。

この合唱団は40年前にNHK熊本中央放送局のプロデューサーであった妻城さんからの依頼をうけて編成したもので、全国中継放送の合唱団として発足したものです。（1989）

GK子供唱歌隊と同じく、ラジオ放送のために発足した合唱団であったのだ。ラジオ制作側からの後押しがあったことは非常に大きな力であったと言えるだろう。発足当初は16名からのスタートであり、九州学院高等学校でグリークラブに所属していた卒業生と、岩津の声楽の生徒で結成されたものであった（井上：2006）。インタビューを行ったNも、「岩津先生のところに個人レッスンに通っていたら、合唱団があるから来いって言われてね。」と語っている。

岩津がデメーテル男声合唱団を指導していた期間は、昭和25年から37年までであり、合唱団そのものの活動期間から考えれば短いと言わざるを得ないだろう。それは岩津が健康を害してしまったというのが一番の理由だろうが、岩津は「NHKのローカル放送がだんだん少なくなっていったのが原因ですよ」（岩津：1975、11回）と語っており、ラジオ放送のために発足した合唱団だからこそ、継続させる難しさもあったものと思われる。しかしNは、「みんな仕事があるでしょ。だんだんバラバラになってね。」と語っており、ラジオ局のことだけでなく、様々な理由が重なった結果であったと考えられる。こうして、一旦は解散となったが、歌いたいという気持ちを持ち続けていたメンバーが昭和58年の岩津の謝恩会で集まり、新たな指導者を

迎えて活動を再開するのである。指導者も代わり、メンバーも代わったが、発足当時のメンバーも在籍しており、現在も歌い続けている。

表 デメーテル男声合唱団の主な活動

昭和25年5月	団結成
昭和26年	第6回西部合唱コンクール西日本第3位 《やまとは》(信時潔)
昭和27年	NHK熊本中央放送局専属合唱団として毎月定期全国放送を行う
	第7回西部合唱コンクール西日本第3位 《幸いなり選ばれし者》(チャイコフスキー)
昭和28年	第8回西部合唱コンクール西日本第3位 《牧人の安息日の歌》
昭和31年	第11回西部合唱コンクール西日本第3位
昭和38年	第1回岩津範和先生謝恩音楽会に出演
昭和54年	第2回岩津範和先生謝恩音楽会に出演 (ここからは工藤勇壹氏の指導となる)
	熊本マードレ・コール十周年記念コンサートに賛助出演
昭和55年	熊本観光フェスティバルに出演
昭和56年	第4回全日本おかあさんコーラス西部支部大会に特別出演 第1回「男声合唱の夕べ」開催
昭和57年	熊本県民第九の会「第九」演奏会(第1回)出演(以降毎年出演)
昭和58年	第2回「男声合唱の夕べ」開催
	熊本オペラ芸術協会の歌劇「カルメン」に出演
昭和59年	岩代浩一「イワシロ音楽館」出演
	第3回「男声合唱の夕べ」開催
	ラ・スカートラ・マジカの歌劇「魔笛」に出演
昭和59年	熊本オペラ芸術協会の歌劇「魔笛」八代・人吉公演に出演
	熊本マードレ・コール十五周年記念コンサートに賛助出演
昭和60年	第4回「男声合唱の夕べ」開催
	岩津範和先生傘寿記念祝賀音楽会出演
昭和61年	岩代浩一「イワシロ音楽館」出演
	熊本オペラ芸術協会の歌劇「魔笛」に出演
昭和62年	第5回「男声合唱の夕べ」開催
平成元年	第6回「男声合唱の夕べ」開催
平成2年	創立四十周年記念演奏会開催 第7回定期演奏会
平成3年	熊本県合唱コンクール出場
	岩津範和先生米寿記念音楽会出場
平成4年	慈愛園 慰問演奏会 開催
	県立劇場十周年ガラコンサート出演
平成5年	熊本県合唱コンクール出場
	岩津範和先生熊日賞受賞記念祝賀音楽会出演
	熊本県民第九の会「第九」演奏会(第11回)出演
平成6年	第8回定期「男声合唱の夕べ」開催 熊本県合唱コンクール出場

平成7年	桐の会 音楽会出演(以降毎年出演)
平成8年	第9回定期「男声合唱の夕べ」開催
平成9年	熊本県合唱コンクール出場(金賞) 九州合唱コンクール出場(銅賞)
平成10年	熊本県合唱コンクール出場(銅賞)
平成11年	熊本県合唱コンクール出場(金賞) 九州合唱コンクール出場(銅賞) 国体秋季大会 合唱隊として出場
平成12年	第10回定期「創立50周年記念演奏会」開催 日本フィル「第九」出演
平成13年	熊本県合唱コンクール出場(銅賞)
平成14年	熊本県合唱コンクール出場(銀賞)
平成15年	第11回定期開催 NHK熊本開局75周年記念コンサート出演 熊本県ヴォーカルアンサンブルフェスティバル出場(以降毎年出場) 熊本県合唱コンクール出場(金賞) 九州合唱コンクール出場(銀賞)
平成16年	熊本県合唱コンクール出場(金賞) 九州合唱コンクール出場(銅賞)
平成17年	第12回定期開催 大分「南蛮コール」定期演奏会出演

「デメーテル男声合唱団創立五〇周年記念コンサート」プログラムと「デメーテル男声合唱団創立60周年記念コンサート」プログラムをもとに筆者が作成

3 合唱団の練習

合唱団の練習はどのようなものであったのか、メンバーの記憶から見ていくことにしたい。

GK子供唱歌隊の練習は週に2回、放送局で行われていた。興味深いのは、曲の習得過程である。週に2回行われる練習で楽譜が配られることは全くなかったようだ。「歌詞だけを書いた紙のファイルは持っていた。童謡や唱歌を歌ったと思う。」(M)と言うように、今回インタビューを行った全員がGK子供唱歌隊の中では楽譜を取り扱っていなかったと述べている。常に岩津が歌い、それを聴いて覚えるという形で曲を習得していったのである。「先生も楽譜なしで指揮をしていた。」(K) そうである。

曲は、童謡や唱歌が中心だったようだが、斉唱だけでなく、輪唱や二部合唱、さらには独唱や二重唱なども組み込まれていたようである。それは「やっぱり(ラジオ放送としての)変化をつけるためよね。」(M・K・I) という理由だったようだ。二部合唱の場合も、「ちょっと待って、って言って、先生がその場で下つけてね。それも聴いて覚えたよね。」(K) という感じで、もともと二部合唱の楽譜があったわけではなく、その場で岩津が二部合唱にしていたようである。また、独唱や二重唱については「(生放送)当日、急にここ歌いなさいって言われて、一人で歌ったこともある」(K) と述べられた。「きっと緊張させんためよね」と振り返っており、岩津が子どもの様子を見ながら決めていたことがうかがえる。

実際の指導はどうだったか、という問いには全員が「優しかったよね」と述べている。また、発声について細かく指示を出すことはなかったようである。子息であるSも岩津の指導について、「発声を一人ひとりつくるようなことはしなかった。一人ひとり違うんだから素直な声を出してってだけ。そうすると、いつの間にかいい発声になるんですよ。」と述べている。

このように、合唱指導の中での発声については、「自然に」というのみで細かい指示はなかったようだが、それはこだわりがなかったというわけではない。岩津は東京在住の昭和15年5月に、東京日日新聞社と日本ビクター主催のコンクールで教え子を優勝に導いている。このことは、岩津にとって誇りであり、自身の指導に自信を持つことができるものであったようで、後にもよく語っていたそうである(A)。この時の評価について「裏声発声をやめて、子供らしい発声をさせたのが評価されたようです」(岩津：1975、7回)と語っており、岩津の児童発声に対する考えがここに現れている。当時の児童発声の考え方は、「弱声を中心とした発声を批判する意見が多く見られるようになった」(岩崎：1981、p. 24) 時期であり、その流れとも一致する⁶。

岩津の「自然に」という指導はどこから生まれたものだったのだろうか。そのヒントの一つは、岩津自身の声楽の学びにあったと考えられる。

先述した通り、岩津は東京にいる間に個人的に声楽のレッスンを受けている。その時の下八川圭祐⁷のレッスンが、「発声学などという理屈はいらん、ただマネしろ」(岩津：1975、8回) というものであったようだ。ここで岩津は、自分がレッスンを受けるだけでなく、他の生徒たちのレッスンを多く聴くことで学んだと述べている(岩津：1975、8回)。岩津は、声楽の指導で大切なことは「相手の声の欠点を見抜くこと」であると述べているが、これこそ生徒の悪いところを真似したり、生徒に真似させたりするという下八川のレッスン方法から学んだものなのである。GK子供合唱隊では楽譜からではなく、耳で聴いて曲を覚えるという方法をとっていたが、これは単に曲を覚えるということだけではなく、自然と岩津の声を聴き、その声を真似することによって、声を育てていたのだと考えられる。

デメーテル男声合唱団の練習については、練習に使用していた曲について、「(合唱団に入って) びっくりしたのが、オペラの合唱曲をバリバリ歌っていたこと」(N) との記憶が語られた。「これはとてもついていけない」と感じたそうである。また、「岩津先生に言われて編曲もやった。(先生に) 持っていくと、この音の移行は変だとか、これは平行5度じゃないかとか言われて、それで理論を勉強しました」(N) というように、メンバーに合唱の編曲をやらせることもあった

ようだ。岩津の個人的な声楽の生徒や、高校時代のグリークラブのOBがメンバーであったデメーテル男声合唱団では、より音楽的にも技術的にも高いレベルのものを目指し、個々の力も伸ばそうとしていたと考えられる。

4 発表の場

ラジオの生放送のためにスタートした2つの合唱団であるが、生放送だけでなく多くの発表の機会があった。GKこども唱歌隊のメンバーからは、「いろんなところに演奏に出かけた。」(M・K・I) という話が聞かれた。岩津も「子供の日などはよくステージで歌っていましたね。」(岩津：1975、10回) と述べている。人吉市や、動物園などに出向き、演奏を披露していたようである。子どもたちにとっては遠足のようなものでもあり、全員で同じ衣装を揃えてもらったり、演奏のご褒美として文具などをもらえることもあるなど、楽しい思い出として記憶に刻まれている。「今考えると先生も引率で大変だったよね」(K) 「家の遠かった人は、前の日に先生のところに泊めてもらってたよね」(K) と振り返るように、岩津は単なる合唱の指導者としてだけでなく、普段の子どもたちの面倒もみていたものと思われる。

また、他の合唱団との合同演奏会も行われていた。九州学院高等学校のグリークラブの発表会に、GK子供唱歌隊、デメーテル男声合唱団が出演し、さらにヴァイオリン独奏や独唱などの賛助出演も得ていたことが記録に残っている⁸。当時の子どもたちの記憶にも、「九学(九州学院高等学校)の講堂だったかしらね。お兄さんたちと一緒に演奏会あったよね」(M・K・I) 「一緒に歌ってもらったよね。」(K) と、印象深く残っている。それは「いい靴を履いて行った」(K) という楽しかった記憶としても残っているようであった。

ラジオという観客が見えない場所での演奏だけでなく、聴き手で見えるところでの演奏は、聴いてもらえる喜びを感じられる大切な経験になったものと思われる。そして、それぞれのグループの合唱を聴き合い、一緒に歌ったことは、大きな刺激になったものと考えられる。

5 個々の関わり

岩津は合唱としての指導だけでなく、そのメンバーに対して個人指導も行っていた。合唱団のメンバーとなったことをきっかけとして、個人指導に通ったメンバーもいれば、岩津の下でもともと個人指導を受けていたことが縁で、声をかけられて合唱団に入ったメンバーもいる。合唱団の全員が個人指導を受けていたわけではないが、合唱の指導と個人指導は、互いに支

え合い影響しあっていたものと考えられる。

子どもの場合は、「岩津先生のところに個人レッスンに行き、ピアノをみてもらっていた。バイエルの1番からやった。」(M) というように、ピアノを習っていることが多かったようである。合唱団の練習では楽譜を用いていなかったが、当然ここでは楽譜を用いることになる。また、声楽の個人指導を受けていたメンバーもあり、「声楽をみてもらっていた。発声のときに、腹筋を使うと言われた。」(K) と語っている。「唱歌隊では発声は何も言われなかった。」(K) こととは異なり、声の出し方について習ったそうである。

またOは聞き取り調査の中で、変声期の指導について感謝とともに、次のように述べている。

日本歌曲だったと思うけど、それを少しずつ音域を下げていったんですね。「下げておいで」と言われて、楽譜を書いて持って行って、それで先生に伴奏してもらいながら歌って。気がついたら音域が下がっていたという感じで、つまづくことなく変声できてましたね。

変声期の声の指導だけでなく、音域を下げるための楽譜を書くことにより、楽典を学ぶことにもつながっている。

当然ではあるが、合唱団としての指導と個人への指導は異なる。先述したように、岩津は声楽指導で大切なことは「相手の声の欠点を見抜くこと」だとしている。個々のレッスンの中で声についても、その他の音楽面についても丁寧に向き合い、その時にその教え子に必要な指導を行っていたことがうかがえる。

合唱団のメンバーは必ずしも、音楽の専門家になることを目指していたわけではない。しかし、個々にピアノや声楽、そして、理論についても学んでいたのがある。合唱という面からだけでなく、様々な側面から音楽に関わることを勧めていたと言えるだろう。これは、岩津自身が声楽という側面だけでなく、作曲も学んだという経験を持つからこそその勧めだったと考えられる。そして、それが個々の音楽の力をあげることにつながり、合唱団としての力にもなったのだろう。

まとめ

岩津の合唱指導は、「自然に」と言うのみで、細かな指導は行なっていないように思える。にも関わらず、素晴らしい演奏ができあがっていたのは、岩津の幅広い音楽の学びと経験に支えられた指導によるものであると言えるだろう。当時、日本のトップレベルにあった声楽家に学び、声楽家としての専門技術と知識をもっていたこと、そして声楽だけでなく、作曲についても学び、音楽の知識を深めていたこと、さ

らには、小学校や東京での児童合唱団の指導など、長く子どもの音楽教育に携わり、指導者としての経験を積んでいったこと。これらが、様々な側面から合唱を素晴らしいものへとつくりあげていく力となったのだと考えられる。岩津の功績は、声楽家として作曲家としての専門性、教育者としての経験を持って、様々な合唱団をつくりあげ、その合唱団が演奏を披露する機会を設けて成果を発信していったことにあるだろう。そしてこれが熊本の合唱を引っ張っていくことにつながったのである。

今回は合唱指導に焦点を当てたが、最初に述べた通り、岩津の教え子には声楽家として活躍している者が非常に多い。今後は、声楽教師としての側面も今後明らかにしていくことで、合唱教育との関わりを明らかにしていきたい。また、今回取り上げたGK子供唱歌隊とデメーテル男声合唱団は、ラジオ放送のために発足した合唱団であるが、いくつもの団体が当時発足している。ラジオ放送の役割についても、明らかにしていきたい。

(本論文は、平成28年度の「日本音楽教育学会第47回大会」において口頭発表したもの基に、まとめなおしたものである。)

注

- 1 本名、岩津勝治。「範和」と改名している。
- 2 日本の合唱史については、戸ノ下達也・横山琢哉(2011)『日本の合唱史』青弓社に詳しい。また、嶋田由美(2005)『「東北うたの本」と仙台放送児童合唱団：戦後の児童文化育成と学校音楽教育における意義』『和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 15』pp. 95-104など、少しずつ地方での合唱指導の取り組みが明らかにされ始めたところである。
- 3 拙論(2017)「有馬俊一の東京音楽学校甲種師範科卒業後の音楽活動の再評価」『愛知教育大学研究報告 第66輯』pp. 11-15。
- 4 昭和43年に熊本児童合唱団と改名。平成17年から現在の「NHK熊本児童合唱団」となる。
- 5 7名の方へ聞き取り調査を行った。
Mさん：GK子供唱歌隊の2期生。現在は合唱団の指導者。
Kさん：GK子供唱歌隊の2期生。現在コーロ・フィオーレに所属。
Iさん：GK子供唱歌隊の1期生。
(Mさん、Kさん、Iさんは3名揃って、2016年7月31日 熊本市内にてインタビュー実施)
Oさん：GK子供唱歌隊のメンバー。
(2017年5月26日 名古屋市内にてインタビュー実施)
Nさん：デメーテル男声合唱団の2期生。現在もデメーテル男声合唱団に所属(2016年8月26日 熊本市内にてインタビュー実施)
Aさん：岩津範和先生の息子さん。現在も合唱団の指導者。(2016年7月30日 熊本市内にてインタビュー実施)
Sさん：岩津範和先生の息子さん。現在も合唱団の指導者。(2016年7月30日 熊本県内にてインタビュー実施)

- 6 児童発声の変遷については、岩崎洋一（1981）「児童発声の変遷 1」『季刊音楽教育研究』No. 28 夏号 pp. 18-29、「児童発声の変遷 2」『季刊音楽教育研究』No. 29 秋号 pp. 63-70、（1982）「児童発声の変遷 3」『季刊音楽教育研究』No. 33 秋号 pp. 152-155に詳しい。
- 7 下八川圭祐は、昭和を代表するバス歌手であり、昭和音楽短期大学の設立者である。「共同研究 短期大学における実技教育の目的と手法についての研究報告書」（昭和音楽大学平成21～22年度）によれば、早くからベルカント唱法に取り組んでいたこと、発声の指導にこだわりがあったこと、レッスン方法は「まねしなさい」というものであったことなどが述べられている。
- 8 九州学院百年史編纂委員会（2012）『九州学院百年史 —九州学院とその時代—』の中に、昭和30年12月18日に第七回グリークラブ発表会が行われ、GK子供唱歌隊、デメーテル男声合唱団も出演したこと、そして、九州学院中学校入学前位の白川和紘（バイオリン）の賛助出演を得たことが述べられている。（p. 724）また、昭和31年12月9日（日）の発表会はグリークラブとき学部の発表会となっており、GK子供唱歌隊、デメーテル男声合唱団と独唱の板橋勝が賛助出演している（p. 735）。

引用文献

- 井上正彦（2006）「範和先生を偲んで」『岩津範和先生追悼演奏会』プログラム。
- 岩崎洋一（1981）「児童発声の変遷 1」『季刊音楽教育研究』No. 28 夏号 pp. 18-29。
- 岩津範和（1975）「この人この道 岩津勝治氏 声楽に魅せられて」①-③ 熊本日日新聞 9月29日～10月11日。
- 岩津範和（1989）「デメーテル合唱団発表会によせて」『デメーテル男声合唱団の夕べ』デメーテル男声合唱団第6回定期演奏会プログラム。
- NHK熊本放送局（1989）『「JOGK 郷土を伝えて60年」番組台本』谷岡印刷。

〈プログラム資料〉

- 「岩津範和先生音楽生活55周年記念音楽会」1979年3月25日（日）熊本市民会館大ホール。
- 「デメーテル男声合唱の夕べ」デメーテル男声合唱団 第6回定期演奏会 1989年3月4日 産業文化会館 7Fホール。
- 「デメーテル男声合唱団創立五〇周年記念コンサート」2000年10月7日。
- 「岩津範和先生追悼演奏会」2006年11月2日 熊本県立劇場コンサートホール。
- 「デメーテル男声合唱団創立60周年記念コンサート」2010年9月12日（日）熊本県立劇場コンサートホール。

（2017年9月25日受理）